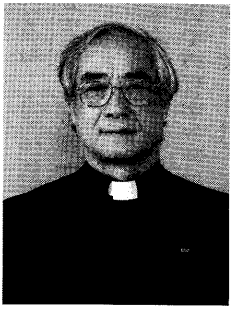
●新春教育随想●

「響きの丘」から

田中　次生
（サレジオ工業高等専門学校長）



一　「響きの丘」

三年前の三月、理事会は育英高専の町田市への移転を決定しました。京王相模原線「多摩境駅」からおよそ八〇〇メートルです。学校の正面入り口のところに「響きの丘」というバス停があります。教職員の中から、バス会社にたのんで、「サレジオ高専前」に名前を変えてもらったらどうかとの意見が寄せられました。いろいろと考えましたが、私は二つの理由で反対しました。一つは、近隣の住宅街ができてバスが通り始めて数年、ようやく「響きの丘」と慣れ親しんできたのに、新参者が来ていきなりバス停の名前まで変えてしまったでは強引過ぎること。もう一つは「響きの丘」という名前を私がもうすでに好きになっていたからです。

高専の敷地は東京都が造成するまでは、二つの丘とその間に谷がありました。それを整地して谷を埋めたのですが、

雑木林に覆われた二つの丘はグラウンドの奥にあり、四季折々の自然を感じさせています。ですから「響きの丘」は、私たちサレジオ高専の丘になります。教育現場で、「響き」は大切な言葉です。私も折に触れて教職員に言います。「誰でも小学校の時「音叉」の実験をしたことでしょう。二つの音叉を少し離しておき、一方を軽く打てば、打たない他の音叉に響き、音を出すあの実験です。「音叉」を私達の心だとすると、教育とは私たちの心の響きを学生たちに伝えることです。そのためにはつぎの三つのことが必要です。一つは、私たちが伝えるべき響きを心に持っていること。二番目に学生たちが教職員の心の響きをキャッチしたいと思うだけの心の通いがあること。そして最後に教職員が、返事として返ってくる学生たち一人一人の響きに静かに耳を傾ける努力をするということです」と。こう考えると「響きの丘」というネーミングは、サレジオ高専の教育の姿勢を、京王のバス停までが認めてくれていることになり、これ以上に良い名前は無いことになります。

二「愛・友情」

私は、サレジオ高専で一年の必修倫理を担当し六年目になります。人間についての哲学分野は、「難しい！」と、文句を言われますが、後期の青年期については、自分たちに直接関係するので、積極的に授業に参加し考えてくれます。その青年期の中でゆっくりと「友情」について考えることにしています。毎年その期ごとに、友情の定義を考えさせ、その定義集をつくるのですが、最後に「愛・友情、それは私とあなたとで歌うデュエット」という定義を紹介します。デュエットの場合基本になるのは、私は私のメロディーを、あなたはあなたの

メロディーを責任を持って歌うということです。しかも両者が自分のメロディーに対して責任を取るとき、そこには新しくハーモニーが誕生します。自分のメロディーを歌いながら相手のメロディーを支え、活かし、尊重することで新しいハーモニーが誕生するのです。丁度、愛し合っている夫婦に赤ちゃんという新しい生命が宿るようにです。愛・友情には新しく創造するプラスアルファがあります。自分の個性を伸ばしながらも相手の個性を尊重し、そしてその調和の中から新しいプラスアルファを創り出していく……これはまさに教育の目的ということになります。

三「Ａｓｓｉｓｔｅｎｚａ（伊）・共にいること」

今まで見てきた「響きをたいせつにする」ことと「愛・友情」を「共にいること」の視点から考えたいと思います。これは、本校の設立母体であるサレジオ修道会の創立者ドン・ボスコが、教育の中で大切にされた「Ａｓｓｉｓｔｅｎｚａ・共にいること」からくるものです。

Ｊリーグが流行らせた言葉の一つに「アシスト」があります。サッカーなどで、得点に結びつく有効なパスをすること、またはそのプレーヤーをアシストと言います。

私は教職員に、いつもこの言葉を拝借して説明します。そして「ゴールを決めるのは学生達。教職員は良きアシストである」と言います。でも言うのは簡単ですけど、得点に結びつく有効なパスをおくるのは大変なことです。有効なパスのためには、次のことが必要でしょう。①パスを受ける選手の能力を知っていること。②どの方向に、どのスピードで、どんな種類のパスを送るのか、瞬時に判断する心の通い（アイ・コンタクト）が両者にあること。③能力プラスアルファを引き出せること。そして自分に意図したパスを送る技術・能力があることなどです。

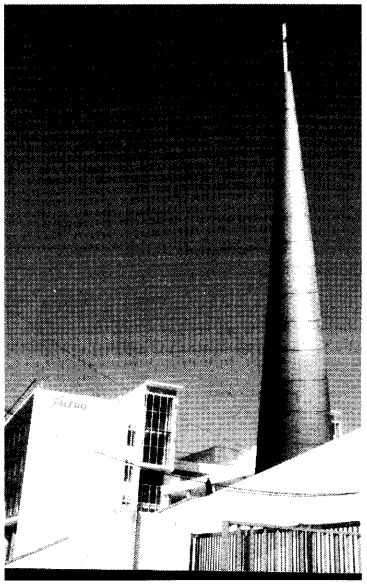
絶妙なパスの場合、受ける選手が自分でもビックリするほどのプレーを引き出したりします。教育とは、「心を耕し、発芽させるわざ」です。教育の語源educare（羅）は、字句どおり「～から引き出す」の意を持っています。だ

から私達教師はどれだけ良きアシストに徹し、学生たちに殊勲のゴールを決めさせることができるのかが問われているのです。

当然のことですが、一瞬の絶妙なパスは、その前に長い練習、つまり共にいる時間が必要です。教職員が学生とともにいることで、学生をよく知り、彼らとの信頼関係のなかでこころを通わせ、彼らの持っている可能性にチャレンジするように導いていくことを、ドン・ボスコは心から願ったのでした。

四「移転」と「共にいること」

私達の学校移転計画は「Ｐｒｏｊｅｃｔ21」と命名されました。大学等の都心回帰現象が見られる中、しかも、創立から七〇年間杉並区民から「育英高専」として親しまれてきたのに、その上校名まで変えてと随分言われました。ペイ・オフとも絡んで秘密にせざるをえず、五月に発表した時は、同窓会・保護者会・学生達と反対の大合唱でした。幸いに教職員が冷静に受け止め、内外にきちんと対応したので少しずつ沈静化して行きました。決定から移転完了までの三年間、「Ｐｒｏｊｅｃｔ21」の根底にあった考え方は「共に」でした。杉並から町田市への移転は、距離にして三八キロ、時間にしては九〇分を克服する必要がありました。いろいろと考えても正解があるわけでなく、最後に達した結論は、「私たちの学校の伝統的な姿勢『共に』を大切にしよう」ということでした。



（イ）移転候補地の最終決定

仲介をお願いした三菱信託銀行不動産部がリストアップしたものから三つに絞り、理事を含めて三〇名ほどのスタッフで見学しました。参加者全員に「自分が理事長・校長なら、どの場所で高専としての教育活動をしたいか、自己責任で選択して欲しい」と願いました。その結果、Ａ候補地が二五名、Ｂ候補地が三名、ＡＢどちらでもよいが二名、Ｃ候補地が〇でした。理事会は答申を検討し、Ａ候補地・現校地多摩境への移転を決定しました。

（ロ）学校の設計イメージ決定について

次に設計会社の決定が必要でした。学校の設計になれている設計会社の中から七社を選び、プロポーサルをお願いしました。コンセプトは次の三点です。①四学科（デザイン・電気・電子・情報）を持つ工業高等専門学校、②カトリックのミッション・スクール、③サレジオ会の学校、です。

一か月たって各社が提出したパネルを会議室に展示し、どの校舎で教育活動をしたいか教職員に投票して貰いました。その結果、現在の学校のイメージをうまく表現した「久米設計」が最高票を獲得したのです。時間的にはかなり窮屈でしたが、学生たちの意見を聞いてみたらと多くの先生方の意見もあり、学生たちにも投票をお願いしました。「デザイン工学科」もあることだし、学生たちの気持ちを新しい学校に向けるためにもよい提案だと思いましたが、問題は、万一、教職員のとは違うものが選ばれたらどうするのかということでした。しかも一社の設計はかなり斬新なもので、教育という視点ではなく、面白さという見方なら、若い人うけするのではないかと思われたからです。でも「案ずるより産むが易し」で、学生たちも同じ久米設計のものを選択しました。

杉並の育英高専は、門の手前に大きな十字架を掲げた塔と教会があり、学校と教会がほとんど一つになっていました。そして武蔵野の緑豊かな自然と静かなたたずまいを誇っていました。学生たちの心では、その姿が自分たちの学校のイメージになっていたのでしょう。久米設計による新校舎のイメージは、最初に目につくのは二五メートルの十

字架塔です。クリスマス・シーズンの現在、塔のイルミネーションはかなり遠方からも人目を引いていますが、一目でミッション・スクールだと分かることが特徴といえるでしょう。私にとっては教職員と学生たちが同じ現在のイメージを選んだのは、学校の一番基本的なところでのいわば共通認識があると再確認できたことが、嬉しいことでした。七〇年間杉並の地で築きあげてきた言わば、校風を是としたと感じたからです。

（八）建物の中の「共に」

新校舎は、校舎棟・体育館・第二アリーナ・夢工房・食堂などを全て機能的に一つに集めました。渡り廊下を使えば雨の日も傘なしで歩けるようになりました。四階建ての校舎棟は、南北の二棟を、二階部分が芝生のルーフ・ガーデンを通して、校舎棟の何処にでも簡単に行けるようになりました。それは校舎内でいつでも自然に触れられるだけでなく、気持ちの上で一体感を作り出してくれました。時には、授業が早く終了した一年生がロビーのピアノを弾いて「まだ授業中の上級生のことも考えなさい」と叱られたりすることもありますが、それはそれで昔の「襖文化日本」を思いださせます。

（九）学校生活の中での「共に」

私達学校生活の中でも、「共に」というドン・ボスコの姿勢を大切にしています。先日の「校内球技大会」のことでした。いつものように若手の先生たちが「教職員チーム」を即製しサッカーにエントリーしました。五月には、五

年電子科に五対〇で勝ったので、今度も楽勝と余裕すら感じられました。対戦相手は四年電気科。「細かなことは言わないけど、卒業したければ、チャント、分かっているな！」などと、学生達にプレッシャーをかけたのに、結果はなんと〇対五の完敗。それだけでなく、二人の先生はひざを痛めて途中退場しその後一〇日間ほど、松葉杖をついていました。でも、グラウンドが喚声と喜びに包まれたのは言うまでもありません。私も五分ほど「友情出演？」したのですが、終了した時すぐ学生に言われてしまいました。

「校長先生は、一度もボールに触っていないんじゃないの？」と。

「バカだなぁーだから私は松葉杖なしでいられるんじゃない……」（これは独り言です）

結語

私は大学紛争の中で学び、卒業しました。そのためか、「同行二人」という考え方が好きです。四国の巡礼者たちが笠などに書きつけ、弘法大師と共に巡礼の旅を続けるというその気持ちが好きなのです。「先達」として前を歩かれる空海上人の後を、必死についていく信徒というとらえ方ではないのです。「同行」して下さる先生、修行の足りない、時には文句たらたらの、すぐ休みたがる私たち弟子を見捨てることなく、一緒に歩いて下さる弘法大師。信者たちの全幅の信頼、そして信者達からそのような信頼を寄せられる弘法大師の人柄が好きなのです。

新しい年が始まります。混迷を続ける日本の社会の中にあって画期的な新年の抱負が必要なのかも分かりません。でも、今年もまた私たちは先輩たちから学んだ教育の基本・原点にある「共に」を大切にするそんな一年にしたいと思っています。